

る概念ないしアイデアに肯定的に言及してもいる（ただし、これが普遍だとは明言しないが）。神の内なるアイデアを認めるならばプラトニズムにして実在論になってしまうのでは、と思うのは早計であって、ものにおいて類・種に対応する *essentia* を認めようとする実在論を否定し、しかも創造という考えを保持する選択肢として、神の内なるアイデア説があり得たというべきだろう。ただし、神のうちなるアイデア説をとったら唯名論かということ、もちろんそうとは限らない。

さて、以上のような事情を背景にしたときに、本発表で提示された二人の思想家の位置づけはこうなろう——12世紀に登場する普遍に関する実在論は、いずれも種に個別の形相が付加するという仕方でも個別化を考えていたのであって、スコトゥスの思想はこの系譜に連なるといえるだろう。むしろトマスのほうが新しいアリストテレスの考えを採用して、つぎはぎをするのに苦労しているのに対し、スコトゥスは、〈質料—形相〉は〈材料—設計図〉と対応させて理解していたとしても、より古い実在論の考え方を採用している、ということになるのではないだろうか。

ちなみに（本発表では、配布資料に引用されていたとはいえ、具体的に言及されはしなかったが）、オッカムは神の内なるアイデアという発想1をも否定して、神が創造以前に見ていたのは未来に存在する諸個物自体であり、それら諸個物が見る働きの対象であるのでアイデアと呼ばれるのだ、と一刀両断の語釈をする (*Ordinatio* I dist. 35, q. 5)。つまり、神は時を越えてすべてを現在のこととして知るのだから（これについては拙論 *Time and Eternity-Ockham's Logical Point of View, in Franciscan Studies* 50 参照）、設計図などという、人間の能力に応じたものを類比的に適用するのは間違いなのである。ところが、設計図がなくなれば、形相か質料かといった個体化の問題もなくなってしまふ。まさに、オッカムにおいて個体化の問題はなくなると言われる通りである。

* * *

討論報告（司会者）

宮内 久光

大鹿氏は個体をめぐる諸問題の中からトマスとスコトゥスにおける個体化の原理の問題に限定して発表された。

ギリシア哲学の伝統にしたがって種の形相を最下位の形相とするアリストテレス的質料形相論に依拠する限り、合成的実体の個体化の原理はトマスにおいては「指定された質料」となるのは自然の成行であったし、また種的形相を限定する形相的原理 *differentia contrahens* を導入して個別性 *haecceitas* を立てるスコトゥスも、種的本性の実在性を容認する限り、個別性を形相ではなく *formalitas* と称するに留めたのである。

トマスの場合に限っていえば、個体化の原理の問題は、普遍に対する個の個別化、すなわち同一種に属する個体間に生じる数の別異と、持続する同一個体の同定という二つの側面がある。大鹿氏の所説は、第一の側面に対しては、認識的な観点から見る限り *hic et nunc* の個体化の根源は『存在と本質について』以来主張されてきた「限定された次元的延長をもつ指定された質料」であるというものである。その結論は、実体的形相そのものあるいはそれを特定する実体的差異はわれわれにとって認識不可能であり、付帯性によってのみわれわれに知られるというトマスの所説に基いている。

第二の側面に対しては、次元的延長の限界づけは同一の個体において変化するものであるゆえに、個体が同一なものとして存続するためには『ボエチウスの三位一体論註解』で試みられたように、個体化の原理としての質料は未規定の次元的延長の下にあるのでなければならないことが述べられた。しかし付帯性としての次元的延長が個体化の原理であることと、「理性的魂はある仕方自己自身によってこの或るものである」という記述との関係が課題として残されることが指摘された。さらに理性的実体が行為の自主性によってすぐれて個体の名に値いすること（作用は個体のみにも帰属するのであるから作用の基体 *suppositum* ないし *persona* と普遍的本性との関係も問題となるであろう）、理性的魂の神による直接的創造、天使論との関わり、などについてなされた言及は、個体の問題が質料形相論の枠組を越えて展開するであろうことを示唆するものであるように思われた。限定された範囲での問題点についての所論は極めて精細で充実した内容に教えられることが多かった。

質問者の清水氏はアリストテレスの新たな導入以前の中世哲学の創造論、創造の設計図としての神の中なるアイデア、ないし新プラトン主義的流出説的創造論をトマスとスコトゥスの説の背景として考察する可能性を質す、という興味深い構想を持っておられたようであるが、時間の制約もあって実現しなかった。お二人の実りある討論は

オッカムの学説をめぐって結晶することが期待されるので今後の機会に俟ちたい。

発表の時間が延長したためもあって十分な質疑応答ができなかったのは司会者の責任であり、ここにお詫び申し上げたい。